

## 7. ことばで防災への思いを伝えたい

四字熟語や慣用句、ことわざは、日常の中でさまざまに引用して使われているのは、簡にして明ということや、内容が意外と奥深いとかさまざまな場面でさまざまな色を発するので重宝するものです。そして、自分では気がつかないにしても、良く縮みの日本人などと言われているように、短い単語で意味深いことを表現するのは得意なのかもしれません。

災害に関係するような状況や教訓的なものを、上手に言い表しているものがあります。防災というと、「**備えあれば憂いなし**」という言葉が先ず思いだされます。普段から周到な準備をしておけば、いざというときにも対応ができるということで、東日本大震災後、水や食料品や救急に使えるもの、暖房衣などをそろえている人が多くいますし、セットで販売されてもいます。確かに、発生時には自宅でも避難所でも役に立つものです。しかし、もっと大事なことは発生前の備えではないでしょうか。自然災害は突発的に来ますし、基本は避難することになりますので、先ず地域のリスクを知り、何が起きたらどこへ、どのように避難するのかを知ることこそが大事です。それが、モノよりも先に理解しておくことが大きな支えになります。似たような言葉に、「**転ばぬ先の杖**」「**降らぬ先から傘**」というものもあります。

そして、災害に遭遇すると、想定状況とは大きく異なるし、すべてが未経験ということもあります。また、情報も虚実が混交したものが飛び交いますので、適切に判断するにも慎重になると思います。いってしまえば、「**隠忍自重**」ということで、つらいことにじっと我慢し、軽々しい行動を慎むということですが、それを支えてくれるものも、事前の正しい知識や訓練です。それが、さまざまな判断や行動を促してくれます。そういうときにこそ、「**深謀遠慮**」ということで深く考えをめぐらして、遠い将来のことまでしっかりと考えることが出来るのだと思います。

災害というような修羅場のときには、往々にして自分に都合の良い情報に惑わされたり、「**付和雷同**」に人の意見や行動についていってしまうということがあります。そのようなときに、適切に分析し、整理して行動することができるのは、事前に学んだ地域知や避難訓練による知識のおかげです。自然災害は、水害、地震、風、火山、津波、山崩れ、寒波、熱波、豪雪、ダム決壊、原発被害、高層ビルの揺れ、インフラ破壊・・・と多岐に亘っています。ここで大事なのは自分が持っている情報をもとに、その場を読み込んだ判断、つまり「**急場をしのぐ**」応用能力を発揮することです。

自然の実態を知り、地域知を有することこそがまさに「知行合一」、「知者は惑わず、仁者は憂えず、勇者はおそれず」ということになるのだと思います。